
処女神の恋

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

処女神の恋

【Nコード】

N0049B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

美貌で長身の若者オリオン。彼を知った月の女神アルテミスは次第に心惹かれていく。だが二人の仲を快く思わないアルテミスの兄アポローンによってその愛は無残にも引き裂かれるのだった。

第一章

処女神の恋

オリオンという若者がいた。黄金色の髪に端整で引き締まった顔に立派な長身、そして勇敢な心と優れた武勇を持っていた。彼はポセイドンの息子であり神の血を引いておりその強さも際立っていたのだ。村々を荒らし回る獅子をその手で倒したことすらあった。ギリシアにその名を知らぬ者はいない英雄であった。

そのオリオンが恋をした。相手はキオス島の王であるオイノピオンの娘であるメロペーであった。彼は長く赤い髪と透き通る様な白い肌を持つその娘を見て忽ち恋に落ちたのであった。

「是非私と一緒に下さい」

オリオンは性急な若者だった。すぐに王宮の庭で遊んでいた彼女の前に跪きそう告白した。周りには王の家臣や宮廷の女達がいたがそれには構わなかった。

「そうすれば貴女は一生幸せになります？」

「あの」

メロペーは自分の前に跪く長身の若者に対して声をかけた。

「オリオン様ですよ」

「はい」

彼はそれに応えて顔をあげた。

「如何にも私はオリオンです」

その黄金色の髪と青い目が輝いていた。その髪はまるで太陽の様であり、目は海の様であった。彼はその青い目でもってメロペーを見ていたのだ。彼女はその目を見て忽ちに心を奪われたのであった。

「嘘もありません」

「左様ですか」

「その上でお願いします」

オリオンのその青い目がさらに光った。

「私を夫に。お願いします」

「ですが私は」

オリオンの目に心を奪われそうになる。しかしそれを必死に拒んだ。

「貴方と共になることは。出来ないのです」

「何故ですか、それは」

「私は。生贄に捧げられる身なのですから」

「生贄に!？」

「はい」

彼女は悲しげな顔で頷いた。

「この島には一匹の怪物がおりまして」

彼女はその悲しげな顔のまま語った。

「その難を逃れる為に年に一度、乙女の生贄を捧げることになっています。私は今年生贄となることが定められているのです」

「何と」

オリオンはそれを聞いて思わず声をあげた。

「貴女が」

「はい」

「こんなに美しい貴女が怪物の生贄に。何ということだ」

折角好きになった人を怪物の生贄にされてしまうとは。オリオンの心に強い憤りが起こった。

それと同時に島を脅かす怪物を討たなければならないと思った。

彼は英雄と多くの人から讃えられており、それに応えなければならなかったのだ。

「姫」

彼は立ち上がった。そして言った。

「その怪物、私が倒して御覧に入れましょう」

「貴方がですか？」

「はい」

彼は強い声で頷いた。

「怪物なぞ。私の手にかかれば」

彼には絶対の自信があった。かつて自分よりも遙かに巨大な獅子を倒したこともある。竜を成敗したこともある。だから彼はどんな怪物であろうとも倒せると思っていたのだ。

「お任せ下さい」

その逞しい胸をドンと叩いて言った。

「宜しいのですか？」

メロペーはおどおどとした様子で問うた。

「本当にそれで」

「構いません」

彼の声は強いままであった。

「私はオリオンですよ」

「はあ」

その言葉が何よりの自信の証であった。

「例えどの様な怪物であろうとも敗れはしません」

「本当ですね？」

しつこいかな、と思ったがまた問わずにはいられなかった。メロ

ペーはまた問うたのだった。

「どんな怪物でも」

「負ければ私は貴女を諦めましょう」

負ける時は死ぬ時だ、ならば諦める他ない、オリオンの考えは非常に単純であった。

「そこまで仰るのなら」

メロペーはそこまで言うのなら、と彼に賭けてみることにした。

「まずは。父に話してみます」

「お願いします」

こうして彼はメロペーの父であるオイノピオン王と会うことになった。彼は祖父に酒の神ディオニュソスを持つ神の血を引く者であった。ディオニュソスはゼウスの息子であり、オリオンの父ポセイドンはそのゼウスの兄弟である。だから彼等は遠い親戚同士であ

ると言えた。もつともお互いそれを今までそれを意識したことはなく、今も意識することはないのであるが。オリオンはただ純粹にメロペーを手に入れたくて彼の前に姿を現わしたのである。

第二章

「お父様」

メロペーは玉座に座る厳しい、髭だらけの顔の男にオリオンを紹介した。彼がそのオイノピオン王である。

「こちらが怪物を倒すと仰っているオリオン様です」

「オリオンか」

「はい」

オリオンは王の言葉に応える。

「そなたの噂は聞いている」

彼がギリシアにその名を知られた英雄であるということは王も聞いている。その逞しい長身と美貌を見て内心さもありなん、と思っていた。

「それで怪物を倒し娘を救い出したいというのだな」

「左様です」

オリオンは片膝を着き礼儀正しくそう述べた。

「ふむ」

王は右の拳の上に自身の頬を乗せて考えごとをしていた。

「あの怪物をな」

「どの様な怪物のですか、それは」

「何でもかなり素早い怪物らしい」

「素早い」

「誰も姿を見た者はいない。まるで影の様に素早く動くという」

「そうなのですか」

「わかつているのはそれだけだ。姿をはつきりと見た者はおらぬ」

「誰もですね」

「そうだ。だからこれだということは言えぬ。申し訳ないがな」

「それは承知しました」

「その怪物を倒すというのは本当だな」

「はい」

オリオンはメロペーに答えたのと同じ強い声で返事をした。

「必ずや怪物を倒し王の憂いを取り除いてみせましょう」

「その褒美が我が娘か」

「駄目でしょうか」

「いや、構わぬ」

王はこれは寛容に認めた。

「そなたは英雄で血筋も申し分ない」

ポセイドンの息子ならば問題はなかった。ポセイドンという神は海がそうであるように荒々しい神であるが尊い血筋なのは事実だからである。王もメロペーも神の血を引くからそれはわかった。

「見事倒せたならば娘をやるう」

「有り難うございます」

「では行くがいい」

王は勝ったら娘をやるのを約束したうえで彼を戦いに行かせた。オリオンは弓矢と剣を持ってその怪物がいるという山に向かった。そこで見事な金髪に黒い目を持つ凛々しい顔立ちの美青年と出会った。

「貴方は」

「私のことは知ってるな」

見れば彼も弓矢を持っていた。肌は白く、今にも輝かんばかりであった。

「アポロンですね」

「そうだ」

青年はすつと笑ってそれに答えた。

芸術と予言、そして太陽を司る神だ。弓の名手でもあり、その双子の妹は狩猟と月の女神アルテミスである。

「そのアポロン神が何故ここに」

「何、妹に頼まれてね」

アポロンは少し軽い調子でそう返した。

「妹というと」

「アルテミスだ。本来はアルテミスがここに出向き怪物を退治する筈だったのだがな。急用で私が来たのだ」

「そうだったのですか」

「オリオンだな」

「はい」

「君のことは聞いている。弓矢の名手だとも」

アポロンはゼウスの息子である。だから彼とオリオンは従兄弟になるのだ。

「君も怪物を倒しに来たようだな」

「はい」

「訳を知りたいが。どうやら単に怪物退治というわけではないようだな」

「ええ、実は」

彼はここで怪物退治に出向いた理由をアポロンに話した。アポロンはそれを聞くと納得したように頷いた。

「成程、そういう事情があったのか」

「そうなのです」

「そのメロペーという女性を手に入れる為か」

「それでは駄目でしょうか」

「いや、別にいいのではないか」

アポロンは別にそれを咎める気はなかった。

「人は誰もが欲というものを持っているしな」

神であっても。ギリシアにおいては人間も神もあまり変わらない性格を持っているのだ。ゼウスに至っては好色であると同時に同性愛も嗜んでいる。またアポロンもそれは同じだ。ギリシアにおいて男同士の愛は女同士の愛と同じく自然な行為であったのだ。

「それは別に構わない。だが」

「だが!？」

「それは怪物を倒してからだ。いいな」

ここで二人は賭けをすることになった。

「私が怪物を倒せば私とそのメロペーの下に行く」

アポロンも話を聞いているうちにメロペーに興味が出て来たのだ。半ば強制的にそれを認めさせた。やはり神の権限がものを言ったのだ。

「君が怪物を倒せば君がメロペーの下に行く。それでいいな」

「はい」

急に持ち込まれた話であったがオリオンはそれを納得した。彼も英雄とまで謳われた男である。負けるとは思っていなかったのだ。

こうしてどちらが怪物を倒すか勝負がはじまった。二人はそれぞれ散った。

オリオンは木の上を伝いながら怪物を探す。探しながらどんな怪物かと考えていた。

「獅子の怪物か？それとも竜か」

どちらでも彼は倒す自信があった。

「いずれにしろ怪物を倒してメロペーは私が」

そう考えていた。その為にも怪物を何としても倒さなくてはならなかった。

暫く木の上を伝っていると気配を感じた。木の下である。

「！？」

大きな影が一瞬現われた。オリオンはそれを見て目を凝らした。

「そつえば」

王宮で言われた言葉を思い出した。その怪物は異様に素早いと。

それだと感じた。何を思ったか下に飛び下りた。

「来い！」

そしてその怪物に対して叫ぶ。

「私はここだ！」

あえて自分自身を囿にした。それで怪物をこちらに引き寄せたのだ。

すぐに影がオリオンに向かって来た。弓をつがえる。

「よし！」

影が跳んだその瞬間に弓を放つ。放ったらすぐに身を屈めた。

影とオリオンが擦れ違ったように見えた。後ろで何かが倒れる音がした。

「やった．．．．．か？」

立ち上がり後ろを振り返る。するとそこには一匹の巨大な黒い蠍が転がっていた。

「これが魔物の正体か」

見ればどうということとはなかった。怪物の正体は単なる蠍であった。付け加えればやはりオリオンの相手ではなかった。それだけのことであった。

第三章

だが何はともあれ怪物はオリオンが退治した。それが最も重要なことであつた。

彼はメロペーの前に蠍の死骸を持って来た。そして怪物を倒したことを自ら宣言したのであつた。

「その蠍が怪物でしたの」

「はい」

彼は答えた。

「恐ろしく素早い蠍ですか」

「そうですか。それなら」

その言葉が何よりの証拠であつた。やはりそれはあの怪物であつたのだ。

「怪物を倒されたのですね」

「そうです」

力強い言葉で頷く。

「では姫」

オリオンはあらためてメロペーの前に片膝を着いた。

「どうか私めを貴女の下僕に」

「オリオン様」

「宜しいでしょうか」

「約束は。守られなければなりません」

それがメロペーの返事であつた。

「そして私も父も貴方を約束をしました」

「それでは」

「はい。オリオン様」

メロペーは言った。

「是非。私を貴方の妻に」

「畏まりました」

オリオンはその言葉に天にも昇る気持ちであった。だがそれを苦々しげな顔で見ている。一人の男がいた。そう、アポロンであった。

「メロペーとはあれ程の美貌の持ち主だったのか」

彼は物陰から二人を覗き見していた。何よりもメロペーの美貌を見ていた。

「あれだけの美貌の持ち主がオリオンのものとなるのか」

そう思うと嫉妬を抱かずにはいらなかった。だが約束は約束だ。彼にはどうすることも出来ない。

しかしここでふと閃いた。彼等と一緒にしなければよいのだと。

「よし」

その閃きに思わずニヤリと笑った。彼はすぐに姿を消しそのまま妹のアルテミスのところへと向かったのであった。

アルテミスは金色の髪を後ろで束ね、緑の目に少女の美貌を持つ神であった。スラリとした長身は健康的であり、脚も腕も若々しく伸びていた。膝までの服を着て何時でも動けるようにしていた。髪の毛の黄金色は兄のそれとは違い優しい光であった。それはまさに月の光であった。髪を束ねているのは銀、彼女の金属であった。

「なあアルテミス」

アポロンはアルテミスの側に来ると親しげに声をかけてきた。

「何かしら、兄さん」

アルテミスはアポロンの腹の底には気付いていなかった。ただ兄が来たので親しく出迎えただけであった。二人はアルテミスの部屋で椅子に座って親しげに話をはじめた。

「御前この前狩りのパートナーを探していたな」

「ええ」

アルテミスは素直に頷く。

「従者達と一緒に狩りをするのも悪くはないのだけれど」

そうは言いながらも少し寂しげな顔になっていた。

「彼女達は女の子だから。やっぱり体力的にね」

「そうだったよな」

アポロンはそれを聞いて満足げな顔をした。

「それで今日は御前にそのパートナーを見つけてきたんだ」

「誰？それは」

「オリオンさ」

彼はここでオリオンの名を出してきた。これこそが彼の企みであつたのだ。

「オリオン！？あの英雄の」

「そう、彼なんだ」

アポロンは続けてアルテミスを誘い込みにかかった。

「彼のことは聞いているよな」

「弓の名手でもあるのよね」

「そう、御前とも充分やっていける程にな」

「私とも」

それを聞いてアルテミスの心が動いた。これがアポロンの狙いであつた。純真な彼女には兄の企みが読めなかったのだ。

「どうだ？」

「そうね」

まだ迷つてはいたがかなり乗り気ではあつた。これは否定しようがなかった。

「兄さんの薦めだし」

「そうか、じゃあ決まりだな」

「えっ、ちよつと待って」

「アルテミス」

アポロンはあえて何時になく優しい声で妹に語りかけてきた。

「迷うのは神としては失格だぞ」

「確かにそうだけれど」

目は泳いでいた。しかし神という言葉を出されては月の女神である彼女がどうも思わない筈がなかった。アポロンはそうしたことまで計算していたのだ。

「迷っては駄目だ」

「迷っては駄目」

「まして御前は狩猟の女神だ。その御前が迷っていてはどのようなのだ？」

兄は言葉巧みに妹を導いていく。

「御前が迷っていては。狩人達が逆に獲物にやられてしまうぞ。それが御前の望みなのか？」

「それは……」

「どうなのだ、アルテミス」

俯いてしまった妹にさらに問う。もうこれで終わりだという手応えがあつた。

そしてそれは当たっていた。アルテミスは遂に陥落した。

「ええ、わかつたわ」

こくりと頷いた。

「神は迷ってはいけない」

「うむ」

「決めたわ。私はオリオンを迎え入れるわ」

顔を上げた。その顔は意を決した顔であり、凜々しくなっていた。美少年とも思える、凜とした美貌であつた。

「その言葉、偽りはないな」

「ええ」

少なくとも彼女は嘘はつかない。正直な女神であつた。

「オリオンを。私のパートナーに」

「よし、それでいい」

アポロンはこの言葉を表と裏、二つの意味で言った。

「これで御前にパートナーが出来たな」

「オリオンが」

「そうだ、オリオンが」

これが表の意味だつた。そして裏の意味は。

彼をメロペーから離せるとほくそ笑んでいた。しかしそれは口に

は出さなかった。彼が裏で、心の中で言った言葉に過ぎなかったの
であつた。

第四章

翌日アポロンはオリオンのところにやって来た。見れば彼は狩りに興じていた。弓矢を手には野山を駆け巡っていたのであった。

「ああ、そこにいたのか」

「どうしたんですか？」

オリオンは狩りを中断した。そして親しげにやって来るアポロンに顔を向けた。

「まずは昨日はおめでとう」

アポロンは最初に彼を褒め称えてきた。

「見事だったよ。流石はギリシアきつてのことはある」

「有り難うございます」

オリオンは英雄であつたが純真な男であつた。やはりアポロンの真意は読めなかった。

「メロペーは君のものだ」

「はい」

「そして君はもう一つ得たものがある」

「もう一つ!？」

オリオンはそれを聞いて目を丸くさせた。

「それは一体何でしょうか」

次にアポロンに問うた。一体何のことなのかわかりかねた。

「私の妹がな」

「貴方の妹君といいますと」

「うん、アルテミスだ」

アポロンはここににりと笑った。

「妹が狩りのパートナーを探していてね」

「狩猟の神がですか」

「そう、それで君をそのパートナーに勧めたいんだが」

事前にアルテミスに誘いをかけているのは伏せていた。

「どうかな」

「喜んで」

オリオンは興奮する声で応えた。狩猟をする者にとって狩猟の神のパートナーとなれることはこの上ない喜びであった。ましてや狩猟の名手であるオリオンにとっては。まさに僥倖であった。

「是非共お願いします」

「ははは、まあそう焦らないでくれよ」

アポロンは余裕を見せた態度でそう返す。

「じゃあ妹にはそう話しておくよ」

「はい」

彼は大きな声で頷いた。

「お願いしますね、本当に」

「ああ、わかった」

アポロンは笑顔で応えた。その笑顔には含ませるものは消していた。

「それじゃあ。吉報を待っていてくれ」

「ええ」

こうして彼はオリオンとアルテミスを引き合わせた。無論これには彼の思惑があった。

「アルテミスとオリオンが一緒にいる時間が多くなれば」

自然とオリオンとメロペーが一緒にいる時間が多くなる。それにアルテミスに仕えている間はメロペーとの交際はかなり制限される。処女神であるアルテミスは純潔を尊ぶからだ。だから彼はメロペーとの交際をかなえい制限せざるを得なかった。結婚は当然諦める他なかったのだ。

「それならば仕方ないな」

メロペーの父である王もそれには納得した。

「では結婚は暫く延期するぞ」

「申し訳ありません」

王の間でオリオンに言い渡していた。オリオンとしても残念

であつたがそれ以上にアルテミスのパートナーとなれることの方が名誉だつたのである。

「だが。頑張ってくれよ」

王は急ににこやかな顔になってオリオンに対して言った。彼もそれがどれだけ名誉なことであるのかちゃんとわかつていたのである。

「名誉な仕事をな」

「有り難うございます」

オリオンは片膝を着いてそれに応える。

「そしてそれが終わればメロペーとの婚姻だ」

「はい」

「狩猟の女神の側にまで仕えた英雄を婿に迎えられるとは。わしも鼻が高い」

彼はそこまで名誉ある英雄を自分の娘の夫にすることを楽しみにしていたのだ。

「わしもメロペーも待っている。頑張つて来てくれよ」

「わかりました」

彼は王とメロペーに見送られアルテミスの側に向かった。彼女はこの時自身の神殿にいた。

「アルテミス様」

従者達が彼女に声をかける。彼女はこの時夜の帳の青い神殿の中で白い光をその手の中にふわふわと遊ばせていた。その白い光は星の瞬きであり、彼女自身は月であつた。髪飾りの銀が眩く輝いていた。

「オリオン様が来られました」

「そう、ここに来たのね」

「御会いになれますか？」

「勿論よ」

彼女は少女らしい晴れやかな微笑みとあどけない声でそう答えた。
「自分から来てくれるなんてまた律儀ね」

「はあ」

「今日にでも自分から行こうと思っていたけれど」

「アルテミス様御自身ですか？」

「私は狩猟の女神なのよ」

彼女は従者達にこう述べた。星は手から離しており、彼女の周りに瞬いていた。

「待つのは性分に合わないの」

「左様ですか」

「獲物でも何でもね」

不敵に笑う。だが彼女は狩猟のことは知っていても他のことには疎い部分があった。そう、少女があまり知らないことに関してである。これには彼女はまだ気付いてはいなかった。

「それなのに向こうから来てくれるなんて。嬉しいわ」

「それではこちらに御通しして宜しいですね」

「ええ、御願いね。そして」

「そして？」

「弓矢を。用意して」

アルテミスはにこりと笑ってこう言った。

「弓矢を」

「そう、弓矢を。すぐに狩に出るわよ」

「もうですか」

「腕試しでもあるわ」

あくまでもある、である。第一の理由は狩がしたいのだ。少女らしい気ままさであった。

「わかったわね。すぐに用意して」

「畏まりました」

こうしてオリオンとの面会と狩への用意がはじめられた。程無く従者の一人に連れられて金髪の高い青年がアルテミスの下に連れられてきた。

「えっ……」

アルテミスはその青年の姿を見て思わず声をあげた。

「あれが………オリオンなの？」

「御存知ありませんでしたか？」

側に控える従者が主にそう声をかけてきた。

「いえ、話には聞いていたけれど」

彼の容姿のことも。だがそれ以上のものが実際のオリオンにはあつたのである。

「凄い………美男子ね」

「左様ですね」

従者はアルテミスの顔には気付かなかった。彼女が紅潮しているということに。

凄いのは顔だけではなかった。服から出ているスラリとした長い手足は筋肉が発達し、逞しかった。胸板も厚く、見事に整っているのが薄い服の上からでもわかる。腹も筋肉でキビキビとしているのがわかる。アルテミスは神とはいえまだ少女である。その彼女がはじめて見る逞しい美しさを持つ青年であつたのだ。

第五章

「アルテミス様」

その青年オリオンはアルテミスの下に片膝を着いた。彼女は彼のの前に立っていた。

「オリオンでございます」

「オリオン、いえオリオン殿ですね」

「はい」

「!？」

従者達はアルテミスがオリオンに『殿』とつけたのを不思議に感じた。だがアルテミスはそれに構わず話を続ける。

「話は聞いております」

「はい」

オリオンはそれに従い応える。顔は俯いたままである。

アルテミスはそれを残念に思った。オリオンの顔が見られないことに不満を覚えた。それであらためて声をかけた。

「顔を上げて下さい」

「宜しいのですか？」

「はい。そして立ち上がるのです」

「わかりました」

神の前に立ち上がる、本来なら不遜な行為であるのだが当の神がそう言うのであるからそうしないわけにはいかなかった。オリオンはそれを受けて立ち上がった。

立ち上がったその姿は実に立派なものであった。少女にしてはかなりの長身のアルテミスより遥かに大きい。女神は顔を大きく上げて彼の顔を見なければならなかった。

「貴方は。狩の名手だそうですね」

「人はそう讃えてくれます」

オリオンはアルテミスを見下ろして答えた。

「左様ですか。では命じます」

アルテミスはオリオンを見上げたまま言った。彼女が顔を見上げるということは滅多にないことであつた。神の中ではかなりの長身である兄アポロンに対してもそうであつた。だが今彼女は大きく見上げていた。それでオリオンがどれだけの長身であるかがわかるのであつた。

「貴方を。私の狩のパートナーに」

「パートナーに」

「異存はありませんね」

「無論です」

それを命じられる為にここに来たのだ。オリオンとしても断る気持ちは毛頭なかった。

「では。すぐに出ましよう」

「すぐに」

「はい、二人で」

アルテミスは朗らかな笑顔をオリオンに向けて言った。

二人はその狩で早速見事な獲物を次々としとめた。鹿に猪に鷲にと。獅子ですらも二人の相手ではなかった。

これだけの獲物を捕らえたのはアルテミスにとつてもはじめてであつた。彼女は思いも寄らぬ成果に顔を紅潮させていた。

「凄いわ、こんなに」

「はい」

そしてそれはオリオンも同じであつた。

「流星は狩獵の女神。御見事です」

「いえ、私の弓だけではありません」

嘘を言わない神である。この時も素直に自分のものではないものを認めていた。

「ここまでやれたのは。オリオン殿のおかげです」

「いえ、私はその様な」

「謙遜をされる必要はありません」

アルテミスは彼にうつすらと笑ってそう声をかけた。

「私は一人でここまで出来たことはありませんから」

「では」

「オリオン殿」

狩に出る前と今では言葉すら変わっていた。そして彼を見る目も。何もかもが変わっていた。

「これから。お願いしますね」

「わかりました」

彼はアルテミスにとってはなくてはならない狩のパートナーとなった。それは彼にとって非常な名誉であり、そしてメロペーにとっても喜ばしいことであつた。メロペーはそんなオリオンの評判を聞くと顔を綻ばせるのであつた。

「やはりそうなのですね」

彼女はオリオンの活躍を聞き笑顔になっていたのである。

「オリオン様ならば。きっとそれだけのことはして下さると思つていました」

「嬉しいですね」

「ええ」

それを問う者達にも応える。今にも天に昇りそうであつた。

「その様な方が私の夫になって下さるのですから」

「左様ですか」

「オリオン様」

そして今は女神の側にいるオリオンに向けて言う。

「何時までも。待つております」

彼女はさらにオリオンに恋焦がれるようになっていた。これはアポロンにとって大きな誤算であつた。そして彼の誤算はそれだけではなかつた。

彼のもう一つの誤算、それは妹アルテミスに対してであつた。彼女は処女神である。だがやはり女であることに変わりはなかつた。そう、男に恋をすることもある女であつたのだ。

彼女は狩の時はいつもオリオンと一緒にいた。そしてそれ以外の時も。遊ぶ時も食事を摂る時も。いないのは寝る時に水浴びをする時、そして彼女の第一の仕事である月の馬車を引く時だけであった。そうした時以外は常にオリオンを側に置いていたのだ。

その話すこともオリオンのことばかりであった。それを見てアポロンは妹がオリオンに対してどういった感情を持っているのかすぐに察したのであった。

「まずいことになったな」

彼は僕である鳥の話を聞いてその整った顔を顰めさせていた。丁度今は彼は太陽を引き終えたばかりで夜になっていた。その上にはアルテミスがいる。

「あいつが。オリオンにか」

上にある月を見上げて呟く。そこに妹がいるのだ。

「はい、間違いありません」

彼に忠実な鳥はそう報告していた。

「アルテミス様はオリオン様のことが」

「それだけはならないな」

アポロンの口調が強いものになった。

「アルテミスは純潔でなくてはならない」

「はい」

表向きはその理由であった。アルテミスは処女神なのだ。その彼女が男に恋をするということはあってはならないのだ。アポロンの言っていることはそうした意味においては正しい。

だがそれはあくまで表向きの理由である。実は彼には本当の理由があった。

（おのれオリオン）

彼は彼を憎んでいたのだ。

（メロペーだけでなく我が妹まで）

自分が手に入れるつもりだったメロペーだけでなくアルテミスの心まで奪った彼が憎かったのだ。男として、そして兄としての嫉妬

が彼の心を支配していた。

（そうはさせるか）

彼がそう思うのは必然であった。兄として、そして男として。だが彼が直接手を下すわけにはいかなかった。そうすれば怪しまれる。ではどうすればいいか。それが問題であったのだ。

しかしこれといって手段が思い浮かばない。オリオーンは強く、そしてアルテミスが常に側にいる。刺客を送るうにも毒を盛るうにもそれは不可能な状況であった。正直手がないように見えた。

第六章

だがその千載一遇のチャンスを見つけた。オリオンがまたアルテミスと共に狩に出ている時であった。

二人は海の側で狩をしていた。そこで鹿を追っていたのだ。その鹿を狩ったところでオリオンが言った。

「海の中へ潜りませんか？」

「海へ？」

「はい。海の中にも豊富な獲物があるのです」

彼は言った。

「ですから」

「けれどそれは」

しかしアルテミスはそれには首を横には振らなかった。

「御嫌ですか？」

「ええ、今は」

アルテミスは今は海に入る気にはなれなかったのだ。今彼女は弓矢しか持つてはいない。弓矢は海の中で使うことは出来ないのだ。

「では私だけで行きましょう」

「貴方だけで？」

「すぐに素晴らしい獲物を見つけて来ますよ。では」

そう言つて海に飛び込んでいった。ポセイドンの息子である彼は泳ぎも達者だったのだ。だから海の中での狩や漁もお手のものだったのだ。

そのまま獲物を探していた。アポロンは偶然それを太陽の上から見た。そしてチャンスが来たことを悟ったのであった。

「よし」

彼はこっそりと太陽の馬車の動きを止めて下界に下りた。そしてアルテミスのところにやって来たのだ。

「アルテミス、そんなところにいたのか」

彼はわざと大袈裟な声を出して彼女のところに来た。

「探したぞ、全く」

「どうしたの、兄さん」

だが彼女には兄の思惑はわかりはしない。その様子に只ならぬものを感じただけであつた。

「あそこを見てくれ」

彼はそう言つて海の方を指差した。

「あそこに一人の乙女が襲われている」

「襲われているですって!？」

それを聞いてアルテミスもまた兄が指差した方を見た。

「見えるな、あの金色の輝きが」

「ええ」

その輝きは実はオリオンの髪の毛の輝きであつた。彼の金髪は海の中でも輝いていたのである。だがそれがアルテミスには乙女の髪の毛に見えたのだ。オリオンの美しい髪がこの時は仇になった。

「今怪物にさらわれている。怪物はあの下にいる」

「乙女の下に」

「生憎私は今は何も持つてはいない」

これは本当であつた。わざとそうしたのではなく本当に何も持つてはいなかったのだ。

「だが御前には弓矢がある。それで乙女を救えるか？」

「乙女を」

「あの輝きの下を撃て。そうすれば乙女は救われる」

（あの男は死ぬ）

心の中の言葉は隠した。思惑は彼の心の中にだけあつた。

「さあ早く」

「え、ええ」

アポロンの急かす言葉に乗せられた。よく考えればかなり妙な話であつたがそれを感じさせないところにアポロンの妙があつた。少女のままのアルテミスにはそれが見抜けなかつたのだ。

弓をつがえキリキリと引き絞る。そして思いきり放った。

弓が輝きの下を射抜いた。赤い血が一条見える。アポロンはその一条を見て会心の笑みを浮かべた。

「これでよし」

「乙女は助かったのね」

「そうだ、後はオリオンが彼女を助けてくれるだろうな」

「そうね、オリオンが」

彼はこの側にいる筈だ。ならばきつと何とかしてくれる、アルテミスがそう思った。

「けど」

だが彼女はここでふと思った。

「何故オリオンが彼女を助けなかったのかしら」

「さてね」

アポロンはその言葉にはとぼけた。

「そのうち出て来ると思うがね」

「そのうちって」

「絶対にね」

そしてここで剣呑で思わせぶりな笑みを浮かべた。

「じゃあな」

それだけ言い残してアポロンは去ろうとする。

「少女は私が助けに行こう」

「お願いするわ」

海に入っていく兄を見送って言う。

「それじゃあね」

「うむ」

兄は海に入りながら笑っていた。その遠くにもの言わぬ男がいるのを確かめてさらに笑った。彼は満足していたのだ。自分の計画が上手くいったことに。そしてそのまま海の中を潜って妹の前から姿を消した。

第七章

「さてと」

アルテミスは兄が消えた後も暫くは海辺にいた。オリオンを探していたのだ。

「オリオン、まだ海の中にいるの？」

だが返事はない。

「困ったわ。何処かしら」

探せども何処にもいない。それで少し苛立ちを覚えていた時だった。

「アルテミス様」

そこに従者達がやって来たのだ。

「何かしら」

「もう時間ですよ」

「時間って？」

「月を掲げる時間ですよ」

「あら」

気付けばその通りであつた。兄が牽く太陽はもうその光を弱め、西の海に沈もうとしていたのだ。

「もうそんな時間なのね」

「そうですね、早く」

「もう月は待っていますわ」

「けれどオリオンが」

まだ見つからないオリオンのことを心配していたのだ。その若々しい眉を顰めさせていた。彼女は気付いていなかったがその顔こそが兄が心配していた顔であつた。恋人を想う顔であつたのだ。

「何処に行ったのかしら」

「オリオン殿のことですか？」

「ええ」

従者にも答える。

「海に入ったきり戻らないのよ。何処にいるのかしら」

「オリオン様なら大丈夫じゃないんですか？」

従者は考えることなくそう述べた。

「あの人なら何処に行かれても大丈夫ですよ」

「そうかしら」

「そうですよ、だってあんなに強いんですから」

彼女達は本当にそう思っただけで安心していただけである。

「それに泳ぎも達者ですし」

「そうよねえ」

「そうそう、海の怪物にだって負けないわよね」

「それもそうね」

アルテミスは彼女達の言葉に納得した。

「オリオンが。そう簡単にね」

「そうですよ」

「絶対ありませんて」

「あの人に勝てるのなんてそれこそ神様だけですよ」

「ねえ」

オリオンも神の血を引いているのだから。だから彼女達も全く心配していなかったのである。それに彼女達はアルテミスと違いオリオンを客観的に見られた。だが彼女達も見落としがあった。それには当の彼女達もアルテミスも気付いてはいなかったのだ。

「ですからここは安心して」

「アルテミス様は月へ」

「ええ、わかったわ」

従者達の言葉に心配を取り除かれた。安心した顔で頷く。

「それじゃあ」

「後はお任せを」

「オリオン様が見つかったら」

「私の宮殿に来るように言っただけ」

「はい」

そんな話をした後で月の馬車に向かう。だがそれから帰ってきて
もオリオンの姿は見えはしなかった。

「オリオンは？」

宮殿に帰って最初の言葉であつた。

「オリオンは何処なの？」

「それが」

従者達は口籠もってしまっていた。

「何処にも」

「帰っていないの？」

「はい」

申し訳なさそうに女神に答える。

「じゃあオリオンの家は？」

「そこにも生きましたが」

「メロペーのところじゃ・・・ないわよね」

うつすらと嫉妬を感じたがそれには気付かない。

「そこでもないようです」

「じゃあ何処なのよ」

アルテミスは困った顔でそれに尋ねた。

「オリオンは何処なの？」

夜が終わり朝になろうとしている。アルテミスはそこで問うた。

「何処にも見当たりません」

それが返事であつた。

「何処におられるのかさえ」

「そんな筈ないわ」

女神はむくれた声で述べた。

「オリオンが私の側を離れるなんて」

「それはそうですが」

「あつ」

だが彼女はここでふと気付いた。

「まだ海辺にいるのかも」

「海辺ですか？」

「そうよ。だって彼海の中でも平気だから
そして言った。」

「それでその中で寝ているのかも。そうよ、きっとそうよ」
半ば自分に言い聞かせていた。

「まだあの海辺にいるのよ。きっとそうよ」

「ではそちらに？」

「ええ、行くわよ」

従者達にそう声をかける。

「それでいいわね」

「はい」

「それでしたら」

「オリオンもオリオンよ」

アルテミスは苦笑して呟いた。

「意地悪なんかして。悪い人」

その言葉は完全に恋する女のものであった。

「意地悪の仕返しは怖いわよ」

彼女もやり返すつもりであった。

「そう簡単には許してあげないから。見てらっしゃい」

「それではアルテミス様」

「ええ」

既に弓矢を受けていつもの狩の格好になっている。凜とした美貌
が銀により際立っていた。

「行くわよ、いいわね」

「はい」

女神は従者達と共に昨日の海辺に向かった。だがそこに彼はい
なかった。

いや、いた。だが声はなかった。彼は一言も語ることなく海辺に
横たわっていたのであった。

「オリオン！」

アルテミスの呼び掛けは悲鳴であった。

「オリオン！」

また彼の名を呼ぶ。だが返事はない。

「まさか、まさか……」

認めたくはなかった。だが認めるしかなかった。

「オリオン、どうして」

彼は一言も語らず横たわっている。目を閉じ、まるで眠っているような顔である。

その胸に矢が刺さっていた。銀の矢である。その持ち主は一人しかない。

「まさか、あの時の輝きは」

アルテミスはそれを見て悟った。アポロンはわかっていて彼女に弓を撃たせたのだ。そしてオリオンを殺させた。今全てがわかったのであった。

「アルテミス様」

従者達が暗い顔で彼女に声をかける。

「オリオン様はもう」

「わかつているわ」

自分の矢を受けて助かる者なぞいない。狩猟の女神の矢は絶対なのだ。それはその女神である彼女自身が一番わかっていることだった。

「けど、どうして」

アルテミスは俯いて目を閉じた。そしてその目から銀の涙を流す。

「どうして、どうして私が」

泣き続けたまま言う。

「オリオンを、どうしてオリオンを」

従者達はそれに何も言えない。アルテミスは顔を上げオリオンをもう一度見た。本当に眠っているようであった。

「オリオン、今まで一緒にいてくれて有り難う」

泣いたままであった。その目でオリオンを見ていた。

「貴方のことは。忘れないわ」

そしてその右手を掲げる。するとそこに淡く白い光が宿った。月の光であった。

「永遠に。これからもずっと」

白い光はゆつくりと女神の手から離れた。緩やかにオリオンの方へ向かっていく。

「私は貴方を忘れない。これから何があっても」

光はオリオンを包んだ。そして上へとあげていく。

「アルテミス様、一体何を」

「オリオンは何時までも私と一緒にいるわ」

彼女は天へと昇っていくオリオンを見上げながら言った。

「これからもずっと」

「ですがアルテミス様は」

「ええ、わかってるわ」

従者達は何を言いたいのかを。彼女は処女神なのだ。男と一緒にいることは許されていないのだ。そうした意味でアポロンの策略は言い訳ができるのだ。処女神である妹を守った、だがそれでもアルテミスはオリオンを忘れたくはなかったのだ。

「それでも。心は一緒にあつていいわよね」

「心は」

「そうよ、だからオリオンは空にあがるの」

オリオンの身体は天空にあった。そしてそこで星になっていた。

「ああ……」

「これで私はずっとあの人と一緒なのよ」

「オリオン様が星に」

「何て雄々しい御姿」

オリオンは星達に姿を変えていた。そこでその勇敢な姿を、生きている時と同じ姿を誇示していた。

「私が夜月の馬車に乗る度にあの人に出会えるわ」

アルテミスはまた呟く。

「何時までも、何時までも」

「永遠に」

「そう、心はいつも一緒なのよ。だからオリオン」

天空にいるオリオンに語り掛ける。

「私の罪を許して。そして何時までも二人で」

女神の目から銀の涙が止まることはなかった。彼女は泣き続けていた。だがオリオンと一緒にになった。女神は月の馬車を駆る度にオリオンと会うのであった。いつも彼のことを想うのであった。

処女神の恋

完

2006・6・22

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0049b/>

処女神の恋

2010年10月8日15時04分発行